アラブのエジプト征服をめぐる論争について

清　水　　誠

初期イスラーム法の考え方では，被征服地の住民から租税を徴収するさい，その征服がアンワ（'anwa）すなわち武力でなされたか，あるいはスルフ（ṣulḥ）すなわち和約でなされたかによって，課税方式に根本的な差別をつける。したがってやや時代が下り，税制に関する諸問題が起こってくると，ムスリムの識者たち，とくに法理論家たちは，各地の征服の仕方がスルフであったかアンワであったか，さかんに議論したものであった。その論争がもっとも激しかったのは，アッ・サワードの場合であったが，エジプトの征服についてもこのような論争が長く続けられたのである。

そうしたわけで，税制史を研究するさいにはかならず「征服」問題が取り上げられる。1950年に発表された D. C. Dennett のすぐれた研究[1]は，エジプトの部分にもっとも多くのページを当てているが，そこでもやはりエジプトの征服とそれに関する論争が扱われている。しかし彼の説明には納得しかねる面があるように思われる。そこで本稿では，Dennett の研究の再検討を出発点として，エジプトの征服問題を考察したい。なおアラビア語の転写法は従来の通りとし，主要史料の略称は次の通りとする。

Amwāl	Abū 'Ubayd (224/838 没)： Kitāb al-Amwāl, al-Qāhira, 1353 H.
Ibn Sa'd	Ibn Sa'd (230/845 没)： al-Ṭabaqāt al-kubrā, 8vol., Bayrūt, 1957–58.
Ḥakam	Ibn 'Abd al-Ḥakam (257/871 没)：Futūḥ Miṣr wa-l-Maġrib, al-Qāhira, 1961.
Ma'ārif	Ibn Qutayba (276/889 没)： al-Ma'ārif, al-Qāhira, 1960.
Balāḏurī	al-Balāḏurī (279/892 没)： Futūḥ al-buldān, 3vol., al-Qāhira, 1956–[1960].
Ya'qūbī	al-Ya'qūbī (284/897 没)： Tar'īḫ al-Ya'qūbī, 2vol., Bayrūt, 1960.
Ṭabarī	al-Ṭabarī (310/923 没)： Ta'rīḫ al-umam wa-l-mulūk, 8 vol., al-Qāhira, 1938–39.
Eutychius	Eutychius (328/940 没)： Patriarchae Alexandrini Annales, texte arabe, 2vol., Bayrūt, 1909, [1954 réimp.]
Kindī	al-Kindī (350/961 没)： Wulāt Miṣr, Bayrūt, 1959.

Sawīrus　Sawīrus b. al-Muqaffa' (IV/X 世紀後半) : History of the Patriarchs of the Coptic Church of Alexandria, Arabic t., Patrologia Orientalis, I/2 & 4, V/1, X/5, Paris.

Ḏahabī　al-Ḏahabī (748/1348 没) : Ta'rīḫ al-Islām, 5 vol., al-Qāhira, 1367–68 H.

Ḫiṭaṭ　al-Maqrīzī (845/1442 没) : al-Ḫiṭaṭ, 4 vol., al-Qāhira, 1324 H.

Taġrībirdī　Ibn Taġrībirdī (874/1469 没) : Nuǧūm al-zāhira, 12 vol., al-Qāhira, 1929–56.

Suyūṭī　al-Suyūṭī (906/1505 没) : Ḥusn al-muḥāḍara fī aḫbār Miṣr wa-l-Qāhira, 2 vol., al-Qāhira, 1321 H.

I

幸いエジプト征服のクロノロジーについては古く A. Butler や L. Caetani の研究があり，部分的には両者間で一致をみないところもあるが，ほぼ下記の年表のようにまとめられている。

639 (18H)	年12月	将軍 'Amr b. al-'Āṣ エジプト国境に入る。
640 (19H)	年1月	Pelusium (al-Farmā) 陥落。
同	5月	al-Fayyūm 地方攻略。
同	6月	Heliopolis ('Ayn Šams) の戦い。
同	9月	バビロン城塞[2] 包囲開始。
同	10月	Cyrus (al-Muqawqis) は 'Amr と降服条約を結び，コンスタンチノープルにその批准を求めるが，Heraclius 帝はこの協約を拒否し，Cyrus を首都に召還する (Butler による)。
641 (20H)	年2月	Heraclius 没す。
同	4月	バビロン開城。
同	6月	アレクサンドリア攻略開始。
同	9月	Cyrus 帰任。
同	11月	Cyrus アレクサンドリアの降服条約を結ぶ。
642 (21H)	年3月	Cyrus 没す。
同	9月	ビザンツ軍，アレクサンドリアよりの撤退完了。
645 (25H)	年	Manuel 指揮下のビザンツ軍アレクサンドリアを占領。
646年夏 (25H年)		アラブ軍アレクサンドリアを再度征服。

この年表でもっとも問題になるのは，640年10月に，Cyrus と 'Amr b. al-'Āṣ

との間で結ばれたとされる和約の件である。Cyrus は，ヘラクリウス帝からエジプトの行政官兼大司教として，アレクサンドリアに派遣されていた人物で，ムスリム史家のいう al-Muqawqis である。この和約はムスリム史家によって伝えられているのであるが，Caetani はこれを否定し，Cyrus がバビロンにいることはなく，ムスリム史家はバビロンの和約をアレクサンドリアのそれと混同していると主張した。これに関して Dennett は Nikiu (Niqīwus：デルタの一都市）の司教ヨハネスの年代記[3]の記述を用いて，Caetani の主張をさらに進めている。

ヨハネスでは，バビロンの和約に Cyrus は登場せず，その和約の内容もきわめて簡単で，バビロンの守備軍は軍需物質をすべて 'Amr b. al-'Āṣ に引き渡すことを条件に，城塞から撤退したという。一方アレクサンドリアの降服条約については詳しく，その内容は7ケ条からなるが，これは Cyrus によって交渉され，彼はそのためにバビロンへ行ったという。Dennett はこの「Cyrus がアレクサンドリアの和約のためにバビロンに来て交渉した」という点を取り上げ，これがムスリム史家を混乱させたのであると主張する。そこで Dennett は，ムスリム史家がバビロンの和約としてかなり詳しく伝えている条項をすべてアレクサンドリアの和約とみなし，その8ケ条をヨハネスの伝える7ケ条のほかに結ばれたものとして列挙している (pp. 70–72)。このような主張は果たして可能であろうか。まず再検討を要する問題である。

ついで Dennett は以下のように論を進めている。アレクサンドリアは回暦25年にビザンツ本国よりの援軍によって叛乱を起こし，そのため，'Amr b. al-'Āṣ 指揮下のアラブ軍によってふたたび征服されたが，そのさいギリシア（ローマ）人のこの行為によって，Cyrus との和約は破棄された。しかし al-Muqawqis との間に新たな協定が結ばれ，コプト人の身分は変らなかった。この al-Muqawqis というのは，Cyrus はすでに死んでいるから彼でなく，また内容はとくにコプト人を扱っているからギリシア人でもない。おそらくこの場合はコプトの大司教ベンヤミンであろう。それはこの協定に関する al-Muqawqis の2ケ条の言葉から判断できる。Dennett はこのように述べて，バラーズリー al-Balāḏurī およびマクリーズィー al-Maqrīzī に記載されている2つの資料を紹介する (pp. 72–73)。この彼の主張に疑点を挟む余地はなかろうか。

ついで Dennett は，アラブ軍のバルカ侵入とその主都 Pentapolis が結んだ年額 13,000 dīnār の定額貢納の和約を説明し，そして以上によって，征服事業が終了したときには，4つの範疇からなる租税制度が存在していたとする。そのうち，当面の課題に関連する要点は以下の通りである。

1. アラブ軍はコプト人の共同体と和約を結んだ。彼らの「貢納」（ジズヤ）は総額でなく，課税率を意味する。
2. アレクサンドリアは武力で征服され，したがって征服軍の意のままになる ḫarāǧ 地である。
3. Pentapolis は毎年増減のない一定額を支払う。この地域は 'ahd（契約）地である。
4. 前代の王領地および税吏不入（autopract）の私領地は，コプト人の和約の対象外で，したがってアラブは，カリフ，ウマルがサーサーン朝の所有地を没収したように，これら私領地を収奪した。のちになって，封土はこの土地のうちから与えられた。

こうして Dennett によれば，エジプト征服は武力か和約かをめぐってムスリム史家たちの間で起こった混乱は，征服の事実のうちに容易に理解できる。すなわちエジプトは武力，和約のいずれによっても征服されたわけで，コプト人と Pentapolis とには和約があり，アレクサンドリアと没収私領地にはそれがないという（pp. 73–74）。彼は以上のように論述し，ついで税務行政の説明に移っている。そこで，これまで述べてきた彼の諸論点に対し，順を追って再検討してみたい。

II

まず，ムスリム史家のいうバビロンの和約は，実はアレクサンドリアの和約の一部であったと断定することは可能だろうか。この点を検討するには，一応エジプトの征服事情に当ってみる必要があろう。征服の模様を伝える史家は多いが，そのうちマクリーズィー，イブン・タグリービルディー Ibn Taġrībirdī，スユーティー al-Suyūṭī，エウチキウス Eutychius などいわば後世史家に属するものは，いずれもイブン・アブドゥル・ハカム Ibn 'Abd al-Ḥakam の記事を転載しているにすぎない。

スユーティーは，直接的には al-Quḍā'ī の al-Ḫiṭaṭ を主に利用しているが，al-Quḍā'ī の出典はイブン・アブドゥル・ハカムである（Suyūṭī I,70–72）。エウチキウスはアレクサンドリアのメリク派の大司教で，ヤコブ派（コプト）のセベルス Sawīrus b. al-Muqaffa'，Nikiu のヨハネスとともに，いわば被征服者の側から歴史を書いていて，興味深い点もあるが，エジプト征服の記事はイブン・アブドゥル・ハカムの抜粋である（Eutychius II, 20–26）。

そのほかムスリム史家のうち，キンディー al-Kindī の記事は非常に簡単で，アレクサンドリアの最初の征服はアンワ，Pentapolis の征服はスルフでなされたことを伝えるのみである。バビロンの和約についてはなんら触れていない (Kindī 30–33)。

タバリー al-Ṭabarī では，Ibn Isḥāq による伝承と，Sayf b. 'Umar による伝承とがやや詳しい。前者はバビロンの征服にほとんど触れていず，ただその征服後 'Amr b. al-'Āṣ がアレクサンドリアへの進撃中，Balhīb まで来たところ，アレクサンドリアの長が使者を送り，ジズヤの支払いを条件に，捕虜の返還を求め，これに対し 'Amr はカリフ，ウマルに指令を求めるなど，両者間に交渉のあったことを伝えている (Ṭabarī III, 195–97)。しかし，この交渉はアレクサンドリアの包囲以前の事件であること，捕虜の処置が内容の主眼となっていることなどから，当面の問題の埒外に置かれる。

後者の Sayf b. 'Umar による伝承は2つあり，そのひとつには，'Amr b. al-'Āṣ がバビロンに達し，援軍も到着したとき，al-Muqawqis は Miṣr の司教 (ǧāṯalīq) Abū Maryam らを派遣して，'Amr との間に交渉を行なわせたが，結局エジプト人たちは受け入れず，交渉は決裂し，その後 'Amr らは 'Ayn Šams へ向かったとある (Ṭabarī III, 197–98)。ところが，この伝承にみえる交渉はバビロンの包囲以前のことで，いわゆるバビロン和約の交渉との間にはかなりの時間的ずれがあり，したがってこの伝承はさし当たって問題にならない。

Sayf b. 'Umar のもうひとつの伝承では同じく戦闘の舞台が 'Ayn Šams に置かれ，アラブ軍はこれをアンワで征服したが，スルフによる征服と同じように扱い，彼らにはズィンマ (ḏimma：保護) を保証したとして，エジプト——'Ayn Šams でなくて——の住民を対象とするスルフの内容を紹介している (Ṭabarī III, 199–200)。しかしこれは，他のいずれの伝承にも現われないヌビヤ人が登場したり，また内容がきわめて特異であることなどから，偽作と考えられる。タバリーにはその他にも伝承はあるが，いずれも資料とするに足らない。

ヤアクービー al-Ya'qūbī の Ta'rīḫ は，簡略ながらかなり適確な史実を伝えていて，つねに注目に値する史書である。ところで，バビロンの攻略に関しては「ムスリム軍はスルフを勧めた」とあるが，そのあとはスルフ説とアンワ説の論点を紹介するのみで (Ya'qūbī II, 148)，ヤアクービー自身は問題を回避している。アレクサンドリアの場合では，'Amr b. al-'Āṣ と al-Muqawqis との間に和約が結ばれたことを認めているものの，その和約の是非をめぐって生じたヘラクリウスと al-Muqawqis との不和

の経緯を述べていて (Ya'qūbī II, 148–49)，年代上の錯誤を犯している。アレクサンドリアの和約が結ばれた当時，ヘラクリウスはすでに死んでおり，また，皇帝に対する怒りから，al-Muqawqis が 'Amr にローマ人には今後和約を承諾しないよう求めたという伝承は，あとで述べるように，バビロンの和約に関連したものであって，アレクサンドリアの場合ではない。したがってヤアクービーのこの資料は参考の程度にとどめねばならない。

バラーズリーの Futūḥ には，人々の見解をおそらく彼自身がまとめたものと，伝承系譜 (isnād) を付したものとの2つの方法による記載があるが，征服の事実そのものを知るには，後者により資料的価値が与えられよう。しかしこれは，その伝承系譜が妥当で，伝承に偽作の可能性がない場合にのみいえることであって，それぞれの伝承にはあらかじめ厳密な批判がなされねばならない。

さて，バビロンの攻略に触れている一般見解に，「城塞はアンワで征服され，ムスリム軍はそのなかにあるものを分捕ったが，'Amr は住民には ḏimma (保護) があるという条件で彼らを安堵させ，その首にはジズヤを，土地にはハラージュを課した。彼はこのことを 'Umar b. al-Ḫaṭṭāb に伝え，カリフはこれを合法とした (Balāḏurī I, 250, n° 529)」というのがある。バビロンは，和約交渉なく武力で征服されたが，住民にはズィンマが保証されたというものである。しかし，ジズヤとハラージュのこのように明確な対位的用語法は，この当時ではまだ考えられないから，この伝承はかなり後世の意見を反映している[4)]。

また 'Amr b. al-'Āṣ の子 'Abd Allāh b. 'Amr が「エジプトのことは人々によくわかっていない。ある者らはアンワで征服されたと言い，他の者らはスルフで征服されたと言っているが，真相はこうである。云々」と語った，というバラーズリーとしてはもっとも詳しい伝承がある。その内容はバビロンの城主と 'Amr との，税制を中心としたスルフの取り決めである (Balāḏurī I, 151–52, n° 534)。ここでは，この伝承の批判を省略するが，これは明らかに偽作されたもので，当面の資料として用いることはできない。

次に，al-Muqawqis が 'Amr b. al-'Āṣ としかじかの条件でスルフを結んだという n° 535 の伝承があるが (Balāḏurī I, 252–53)，これはイブン・アブドゥル・ハカムに記載されているある伝承と同じで，しかも部分的に混乱がみられる (cf. Ḥakam 104, 106–07, 118, 122)。なお厳密には，最後の部分はアブー・ウバイド Abū 'Ubayd の伝承の一部と文章が一致する (cf. Amwāl 142, n° 387)。

また al-Muqawqis と 'Amr b. al-'Āṣ とのスルフに触れている n° 547 の伝承 (Balāḏurī I, 256) は，アブー・ウバイドの Amwāl n° 387 (p. 142) を簡略にしたものである。このアブー・ウバイドの伝承は，バビロンの和約に対してヘラクリウスが激怒し，アレクサンドリアに軍隊を送って戦いを挑んだという部分と 'Amr b. al-'Āṣ がアレクサンドリアの武力征服をカリフ，ウマルに伝えたという部分からなり，いずれも同一の伝承系譜でイブン・アブドゥル・ハカムにみえる (Ḥakam 106, 118, cf. Balāḏurī I, 253)。したがってイブン・アブドゥル・ハカムの伝承を検討しさえすればよい。

アレクサンドリア征服に関する一般見解のうちには，次のような伝承がある。それによると，コプト人だけは調停を望んだので，al-Muqawqis はスルフと一定期間の休戦を求める使者を派遣したが，'Amr b. al-'Āṣ はこれを拒絶し，アレクサンドリアを武力 (sayf) で征服した。動産などは戦利品として分捕ったが，住民にはバビロンの民のようにズィンマを与えたという (Balāḏurī I, 259, n° 554)。これはむろん後世の意見を反映しているに違いないが，アレクサンドリアの征服がどのように考えられていたかという点で参考に値する。

これらのほかに，バラーズリーはアブー・ウバイドから転載したのも含めて，多くの伝承を伝えているが，当面の資料になるものはない。

結局ムスリム史家側からは，エジプトの征服事情をテーマとして，もっとも詳しい記事を残したイブン・アブドゥル・ハカムの諸伝承を厳密に検討する以外に，決め手はないようである。

III

彼の叙述は，一見すると種々の系譜による諸伝承が交錯していて，きわめて煩雑である。そこで，征服事情に関するものを整理してみると，二三の主要伝承系統を中心にして，その随所にいわば注釈の形で，系譜の異なる伝承を挿入していることがわかる。まず征服過程については

'Ubayd Allāh b. Abī Ǧa'far
'Ayyāš b. 'Abbās al-Qitbānī
その他多数
} →Ibn Luhay'a→'Uṯmān b. Ṣāliḥ

の系譜による伝承が中心となっている。これを仮に第1伝承系統と名づけておこう。一

代目のうち，'Ubayd Allāh は総督 Ayyūb b. Šuraḥbīl (在位 99—101 年) の時代に，エジプトの futyā に当たった3人のうちの一人で，法理論家 (faqīh)。生年は60年，没年は132年，異説では135もしくは136年といわれている[5]。同じく 'Ayyāš は伝承家で，没年は133年である[6]。Ibn Luhay'a は法理論家・伝承家で，アッバース朝カリフ，アル・マンスールとアル・マフディーの時代に，エジプトの裁判官を勤めた。生没年は96または97～174年である[7]。'Uṯmān b. Ṣāliḥ はイブン・アブドゥル・ハカムのもっとも重要な典拠者の一人で，エジプトの裁判官を勤めたことのある人。没年は219年である[8]。

この伝承系譜には問題はないようである。ただ最初の2人は1世紀の終りごろから2世紀にかけて活躍した人物であるから，征服当時との間に2世代ぐらいの開きがある。しかし，これはむしろ後世の仮托の可能性が少ないという点で，資料的価値の高いことを示している。この第1伝承系統には，次のような重視すべき内容が述べられている。

① al-Muqawqis は 'Amr b. al-'Āṣ のエジプト進撃の報を聞いてバビロンへ向かった (Ḥakam 84, cf. Ḫiṭaṭ II, 64)。② アラブ軍は城門を開いてバビロン城塞に突入した——「武力で征服した」という説明的文句はない—— (Ḥakam 94–95, cf. Ḫiṭaṭ II, 66)。③ al-Muqawqis は自身や彼とともにいる人々のことを恐れて，アラブのために，コプト人の男各人に 2 dīnār を課すという条件で，'Amr b. al-'Āṣ にスルフを求めていたが，'Amr はこれを承諾した (Ḥakam 95, cf. Ḫiṭaṭ II, 66)。

Dennett が，いわゆるバビロンの和約をアレクサンドリアの和約とみなすうえでもっとも有力な根拠にしたのは，al-Muqawqis がアレクサンドリアの和約交渉のためにバビロンに来たのを，ムスリム史家が混同したという点である。ところが上記の伝承では混同の形跡は認められない。① の記述が正しいとすれば，al-Muqawqis は包囲前にすでにバビロンに到着していたはずである。そのうえ，アレクサンドリア攻略中 al-Muqawqis が和約交渉のためにバビロンに来たとするのは，ヨハネスの年代記にだけみられる独特な記事である。他の史料では 'Amr はアレクサンドリア攻略を直接指揮していることになっており[9]，したがってこの点についての積極的な説明がなければ，ムスリム史家の混同を理由に，両和約を同一視しようとする Dennett の論法は説得力を欠く。また仮にアレクサンドリアの和約がバビロンで交渉されたとしても，それは何もバビロン和約の存在を否定することにはならない。

バビロン和約の交渉経過に関しては

一団の tābi'ūn→Ḫālid b. Yazīd→ {Ḫālid b. Ḥumayd / Yaḥyā b. Ayyūb}

→Ḫālid b. Naǧīḥ →'Uṯmān b. Ṣāliḥ

という系譜をもつ伝承によって，かなり詳細に伝えられている。これを第2伝承系統と名づけておこう。 tābi'ūn とは，エジプトを征服したアラブ・ムスリムの次の世代の人々のことを意味する。Ḫālid b. Yazīd は法理論家で139年に没している[10]。Ḫālid b. Ḥumayd は伝承家で，没年は169年である[11]。Yaḥyā b. Ayyūb は法理論家，没年は163もしくは168年といわれている[12]。 Ḫālid b. Naǧīḥ はどんな人物か比定できなかったが，前二者による伝承を多く集めており，'Uṯmān b. Ṣāliḥ はそれをそのまま利用したらしい。

この系譜そのものには問題はなかろうが，ただ第1の典拠者を tābi'ūn と断わっていることにやや危惧が感じられる。法理論家 Ḫālid b. Yazīd の意見が反映している可能性もあるわけで，その点で内容の厳密な検討が必要であろう。この伝承によると次の点が指摘される。

① 和約交渉はバビロン包囲の1ケ月後に始まったが，成立までにはかなりの日数を要し，その間戦闘は行なわれていた。② アラブ軍はスルフとジズヤに賛成せず，土地のすべてが彼らのfay' と ġanīma となるまで徹底的に征服することを主張した。しかし 'Amr b. al-'Āṣ はカリフ，ウマルとのかねての約束により和約を承諾した。③ 和約の条件は対コプト人のものと，対ローマ人のものと別々で，ローマ人についてはビザンツ皇帝の返事が出るまで留保し，その間は休戦とされた。④ 皇帝の拒否は al-Muqawqis を憤慨させ，結局，対コプト人の和約は成立したが，ローマ人については成立しなかった（以上 Ḥakam 95–106, cf. Ḫiṭaṭ II, 66–71; Eutychius II, 23–24)。

ここで，この和約の内容を詳細に検討するゆとりはないが，一見して，その諸条件はヨハネスの伝えるアレクサンドリアの和約[13]とまったく異なる。もし Dennett が主張するように，両者の和約がもともと同一，すなわちアレクサンドリアの和約であったならば，両者間にかなりの共通点が存在するはずである。これらの和約は明らかに別個のものであり，これを同一視して，両者の諸条件を並置することはできない。

さらに，「25年のアレクサンドリアの反乱によって Cyrus との和約は破棄されたが，al-Muqawqis との協定によってコプト人の身分は変らなかった」と Dennett が主張するに当たって，その根拠にバラーズリーおよびマクリーズィーから援用した al-Muqawqis の言葉は，実は筆者がいま述べた伝承の④の一部分にすぎない。Dennett が挙げた2資料のうち，第2のもの（Ḫiṭaṭ II, 71）がそれで，第1の資料（Balāḏurī

I, 253; Ḫiṭaṭ I, 263) は目下の④の異伝として，やはりイブン・アブドゥル・ハカム (p. 106–07) が伝えるものと一致する。そうなれば，この al-Muqawqis は Cyrus でなくてコプトの大司教ベンヤミンとする Dennett の説は，もはや問題とするに足らない。アレクサンドリアの叛乱を待たずとも，ローマ人は和約破棄の状態にあり，それによってもコプト人の身分は変らなかったのである。したがって，バビロンの和約後もなおローマ人に対する戦闘は続けられた。年代的には，こののちヘラクリウスの死，バビロンの開城，アレクサンドリアの攻略開始へと続くのである。

なおセベルスによると，バビロン征服のさい，町の主だった人々が 'Amr b, al-'Āṣ と契約 ('ahd) を結び，コプト人は保護を得たが，ローマ人は滅ぼされたという (Sawīrus, PO, I, 494)。要するに，バビロンの和約が Cyrus によって交渉されたか否かはともかくとして，それがなんらかの形で成立したことは間違いない。現存のヨハネスの年代記では，その部分の記事が失われているとみなすべきである。

IV

さて，アレクサンドリアの征服はどのように伝えられているであろうか。さきに取り上げた第2伝承系統では，記述はそのままアレクサンドリア進撃に移り，各拠点でビザンツ軍がアラブ軍に殲滅されたことを述べているが，そのあとのアレクサンドリアの征服そのものについては比較的簡単で，ただ最後に，征服後の政治的処理に関する意見めいた伝承を伝えているにすぎない。そこでイブン・アブドゥル・ハカムは，非常に多くの異伝を挿入して，これを補っている。

征服の仕方および戦後処理に言及している伝承には，この第2伝承系統のほか

al-Ḥusayn b. Šufayy→al-Ḥasan b. Ṯawbān→ {Mūsā b. Ayyūb / Rišdayn b. Sa'd}
→Hāni' b. al-Mutawakkil

の系譜によるものと

Yazīd b. Abī Ḥabīb[14]→al-Layṯ b. Sa'd→'Abd Allāh b. Ṣāliḥ

によるものとがある。これらを仮にそれぞれ第3，第4の伝承系統と名づけておこう。第3系統の al-Ḥusayn b. Šufayy は伝承家の Šufayy b. Māti' (105年没)[15] の子で，没年は129年である[16]。al-Ḥasan b. Ṯawbān は伝承家で145年に没している[17]。Mūsā b. Ayyūb は，この al-Ḥasan と同時代に属する同名の伝承家に当たると思われるが，没年は不明である[18]。Rišdayn は伝承家であるが，Ibn Sa'd は ḍa'īf (弱

い）と断じている。没年は188年である[19]。Hāni' b. al-Mutawakkil はイブン・アブドゥル・ハカムの有力な典拠者の一人であるが，どんな人物か筆者には比定できなかった。いずれにせよ，この系譜にはあまり有名な人物はいない。

第4系統の Yazīd b. Abī Ḥabīb は有名な法理論家・伝承家で，さきの 'Ubayd Allāh b. Abī Ǧa'far らとともに，カリフ，ウマル2世の命によりエジプトの futyā に当たった人物である。あまりに有名となったために，彼の伝承には後世の仮托によるものも少なくないようである。生没年は ca. 53～128 年である[20]。al-Layṯ b. Sa'd は Yazīd の弟子で伝承家， futyā にも従事した。生没年は94～165または175年である。Ibn Sa'd によれば，彼の伝承は多いが正しいという[21]。'Abd Allāh b. Ṣāliḥ はこの al-Layṯ の書記を勤めた人で，223年に没した[22]。この伝承系統では， Yazīd b. Abī Ḥabīb の法理論家としての見解が反映していないかどうか注意すべきであろう。

これらの各伝承系統の要点は次の通りである。

第2伝承系統

① アレクサンドリアと，ローマ人を助けてムスリムと戦った Sulṭays ら3ケ村を除けば，エジプト全土はスルフで征服された。② ムスリム軍は，これら3村はアレクサンドリアとともにわれわれの fay' であると主張した。③ カリフ，ウマルは，アレクサンドリアとこれら3村にはムスリム［全体］のために ḏimma を与え，彼らにハラージュを課し，彼らを fay' としたり奴隷（'abīd）としたりするなと命じた（Ḥakam 123, 128. cf. Ḫiṭaṭ I, 268–69）。

第3伝承系統

① アレクサンドリアの征服でハラージュのかかる捕虜多数を得，ムスリム軍はその分配を求めた。② カリフ，ウマルは，分配をせず，ムスリム［全体］のための fay' として，彼らにハラージュを課せと命じた。③ 'Amr はアレクサンドリアの住民を数えて，彼らにハラージュを課した。④ エジプト全土はスルフで［征服された］。……略…… ⑤ ただしアレクサンドリアは契約なくアンワで征服され，彼らにはスルフも ḏimma もないから，彼らを治める者の意のままにハラージュとジズヤを支払った（Ḥakam 121–22, 123–24, cf. Ḫiṭaṭ I, 268; II, 72; Eutychius II, 26）。

第4伝承系統

① 'Amr b. al-'Āṣ はカリフ，ウマルに，アレクサンドリアはどんな契約もなく，アンワで征服されたと書き送った。② カリフは彼の意見を愚なものとし，そうした

過ちを犯さないよう命じた（Ḥakam 118, cf. Ḫiṭaṭ I. 267）。

なお Yazīd b. Abī Ḥabīb の言葉は al-Layṯ b. Sa'd→'Uṯmān b. Ṣāliḥ の系譜によっても伝えられ，アレクサンドリア以外のエジプト全土はスルフで，アレクサンドリアはアンワで征服されたという（Ḥakam 124）。

第2系統と第3系統で注意を要するのは，ファイ（fay'）の語が異なった意味で用いられていることである。嶋田襄平氏のファイ理論展開に関する研究によると，ファイはもともと征服軍によって分配されるべき戦利品を意味していたが，ウマイヤ朝の土地不分配の政策を立法化したウマル2世（在位99—101年）の規定によって，ムスリム全体の利益のために保留された征服地の意味になったという[23]。すると第3系統は，少なくともウマル2世時代以後の意見が反映していることになる。また，ズィンマ（ḏimma）の保証を与えたか否かについても両系統はまったく矛盾する。ここで詳しく論ずるゆとりはないが，第3系統にはウマイヤ朝中期以後の政策がかなり折りこまれているのである。なお第4伝承系統には，カリフ，ウマルは3ケ村——1村のみ第2系統と名前が異なるが——の住民を全コプト人とともにズィンマの民とした，という伝承もある（Ḥakam 122, cf. Ḫiṭaṭ I, 268）。したがって第4系統は第2系統とほぼ同一の見解をもっているといえる。ただ Yazīd b. Abī Ḥabīb がファイの語を用いなかったのは，彼の微妙な立場を示すと考えられる。

しかし，いずれにしてもアレクサンドリアの武力征服を主張する点では，これら主要伝承系統は一致している。むろん和約のことは何も告げていない。ところで，ヨハネスの年代記によって，アレクサンドリアの和約が結ばれたことは事実である。イブン・アブドゥル・ハカムはそうした伝承のあることを認めているが，それも単に，バビロンの和約の注釈の形で記しているにすぎない（Ḥakam 106, cf. Ḫiṭaṭ I, 263）。伝承の最初の典拠者と征服当時とはそれほど年代差があるわけでもないのに，これら主要伝承系統はなぜアレクサンドリアの和約を抹殺したのであろうか。実は，これにはウマイヤ朝の徴税政策がからみあっているのである。

アッ・サワードが征服された回暦15年前後ごろのカリフ，ウマルの方針では，征服地をズィンマのある土地とファイの土地とに区別し，前者はアラブ軍の間で分配させず，後者のみ分配を許した。分配の対象になったのは，アッ・サワードではサーサーン朝の王領地やアラブ軍に抵抗した原住民の土地などのサワーフィーで，いわばアラブ軍が武力で手中にしたものであった[24]。ところが，おそらく肥沃で広大でもあったサワーフィーを分配してしまったのでは，政府ひいてはイスラーム共同体の財政基盤を恒久的

なものにすることができない。そこで晩年，ウマルは政策を転換し，武力で征服した土地でも，なるべく住民にズィンマを与えて土地を分配させず，その代わりアラブ軍には，政府から俸給（'aṭā'）を支給して満足させることにした。こうして生まれたのが20年初（640年末）の dīwān 制度であった[25]。

エジプト征服はちょうどこの前後に行なわれたのである。バビロンの和約を結んだ当時では，アラブ軍はまだ原住民，すなわちコプト人に対してはスルフ，支配者のローマ人に対してはアンワで征服する予定だったと思われる。ところが激しい戦闘が行なわれ，事実上陥落させてしまったアレクサンドリア[26]に対して，カリフ，ウマルはあえて和約を結ばせ，住民にズィンマを与えたのである。ヨハネスの伝える和約の内容は，和約とはいうもののビザンツ軍の完全な敗退を意味する。次のカリフ，ウスマーンもウマルのこの新しい方針を受け継いだらしく，ヤアクービーによれば，25年にアレクサンドリアが叛乱を起こしたとき，ウスマーンは捕虜となった住民を最初の——すなわちウマルが与えた——ズィンマに戻したという（Ya'qūbī II, 164)。第2回目の征服はむろん武力でなされたのであるが，アラブ軍による土地の分配を防ぎ，住民から租税を徴収するには，彼らにズィンマを保証する以外に方法がなかったのである。ウマイヤ朝初期，アレクサンドリアの税務行政は市民の自治に委ねられていたが（Sawīrus, PO, V, 5, 13; Eutychius II, 41 ），これはウスマーンのズィンマを証明している。ウマル2世のファイ新解釈が通説となる以前の第2・第4伝承系統は，このウスマーンの事績をカリフ，ウマルのそれと，おそらく故意に混同したのである。Ibn Luhay'a が第4系統の伝承に，「これはアレクサンドリアの第2の征服のことである」（Ḥakam 118）と注釈づけたのは，案外この事情を物語っているかもしれない。このような混同を行なったのは，当時のウマイヤ朝の政策にある程度迎合するためであった。

イブン・アブドゥル・ハカムはエジプト征服のスルフ説とともに，アンワ説の伝承も紹介しているが，その大半は仮托されたものか，あるいは史実証明がなく，ただ「エジプトはどんな契約もなく，アンワで征服されたと誰かが語った」という形式のものである（Ḥakam 129–32)。そのなかで，ウマル2世がそう主張したというのがある（Ḥakam 131, 132, cf. 208)。そのような伝承はアブー・ウバイド（p. 140–41, n° 382）にも，さらにバラーズリー（p. 255, n° 541）にも伝えられている。事実とは関係なく，カリフの主張がアンワ説の根拠として採用されているのである。それは単にアレクサンドリアのみならず，エジプト全土の武力征服を主張するものであった。これはすでにカリフ，ムアーウィヤ1世以来，ウマイヤ朝政府のほぼ一貫した主張であって，その武力

征服論は実は増税を行なううえで必要だったのである。ウマイヤ朝政府はたびたび増税を強行したが，それは増税しないというスルフの一条件を無視することを意味した。

ムアーウィヤ1世はエジプトの税務長官 Wardān（在位43—44年）に増税を命じたが，Wardān は，彼らとの契約には増税しないという条件があると主張して免職されている（Ḥakam 126, cf. Ḫiṭaṭ I, 127; Amwāl 144, n° 393; Balāḏurī I, 255, n° 542)。また前述のタバリー所収 Ibn Isḥāq の伝承には，ウマイヤ朝の政策を批判した典拠者[27]の言葉も含まれており，彼によると，ウマイヤ朝歴代のカリフは総督に，エジプトは武力で征服され，エジプト人はわれわれの奴隷であり，望み通りに彼らに対して増税したり，新税種を設けたりすることができると書き送っていたという（Ṭabarī III, 197)。この伝承は明らかにアッバース朝時代になって生まれたものであるから，征服そのものについては信憑性はない。しかし典拠者が，アレクサンドリアとその周辺の諸村には契約がないという武力征服の伝承は，このようなウマイヤ朝の主張によって生まれたのである，と断じているのは興味深い。さきの第2・第4系統の伝承は，このウマイヤ朝の政策に一部妥協した意見を伝え，第3系統はウマル2世のファイ理論にもとずいて，ウマイヤ朝の方針を一層取り入れているのである。

こうしてウマイヤ朝政府は，スルフ征服をアンワ征服とすることによって増税を正当化し，原住民の不満を押さえようとしたのであった。ところがアッバース朝になって，143年ごろより伝承の蒐集が行なわれだすと[28]，スルフはもはや動かしがたい事実となった。少なくともそう信じられるに至った。そしてアッバース朝の半ばごろには，エジプトのスルフ征服説が固定したのであるが（Maʿārif 569)，それにはもうひとつの理論転換を経ていた。すなわちウマル2世以後，ムスリム全体のための征服地となっていたファイを，今度はスルフ征服の結果生じたものとする理論が2世紀の半ばごろに生まれ，これが al-Šāfiʿī（204年没）によって確立された[29]。ここに，もはやスルフかアンワかの論争は実質上まったく無意味となり，エジプトのスルフ征服説が決定しても，アッバース朝当局はウマイヤ朝のように理論のうえでは苦慮することなく，ハラージュを徴収できたのである。

*　　*　　*

要するに，原住民に対してはスルフ，支配者に対してはアンワの征服方針から結ばれたバビロンのスルフ，その後，アラブ軍による土地および住民の分配を防ぐというカリフ，ウマルの政策転換から，ほとんど武力で征服したにもかかわらず，住民にズィンマを与えたアレクサンドリアのスルフ，契約破棄の誤解を生んだアレクサンドリアの叛乱

とその再征服，増税のうえで必要になったウマイヤ朝のアンワ征服説というように，歴史的事実のうえに政治的配慮が重なったことを看過，あるいは故意に混同した結果，後世の法理論家の間でアンワかスルフかの諸説が沸騰したのである。Dennett の主張するように，地域によって征服の仕方が異なっていたという単純な理由から，征服論争が起こったのでは決してない。なお本稿ではあまり触れえなかった税制そのものについては，のちに改めて検討したい。

（筆者は京都大学研修員）

註

1) D. C. Dennett: Conversion and the Poll Tax in Early Islam, Harvard Univ. Press, 1950.

2) バビロンは現在のカイロ市南部にあったビザンツ軍の城塞。

3) もとはギリシア語で書かれたが，現在残っているのは，そのアラビア語訳からのエチオピア語訳本のみで，それも翻訳過程中に大部分が失われたため，不完全なものになっている。The Chronicle of John, Bishop of Nikiu, tr. by R.H. Charles, London, 1916.

4) 嶋田襄平「ウマル1世のサワード租税制度」中央大学文学部紀要 21, pp. 22–23；同「大征服時代のアル・サワードのスルフ」中央大学文学部紀要 14, p. 92, p. 96 note (36) 参照。

5) Ibn Sa'd VII, 514; Ḏahabī V, 200, 272–73; Taġrībirdī I, 238; Suyūṭī I, 134.

6) Ibn Sa'd VII, 516; Ḏahabī V, 208, 290; Suyūṭī I, 125.

7) Ibn Sa'd VII, 516; Waqī': Aḫbār al-quḍā, (al-Qāhira, 1947–50), III, 235–36; Ma'ārif 505; Ya'qūbī II, 389, 401 403; Kindī 158; Kindī: al-Quḍā, (Paris, 1908), 58–60; Taġrībirdī II, 77; Suyūṭī I, 134.

8) Suyūṭī I, 137.

9) バラーズリーによれば，アレクサンドリア攻略中，'Amr は Ḫāriǧa b. Ḥuḏayfa をフスタート（バビロン）に残したという（Balāḏurī I, 259)。

10) Ḏahabī V, 240; Suyūṭī I, 134.

11) Suyūṭī I, 126.

12) Ibn Sa'd VII, 516; Ḏahabī V, 185; Taġrībirdī II, 56; Suyūṭī I, 134.

13) ① 一定額の貢納 ② 11ケ月の休戦 ③ ビザンツ軍の平和的撤退 ④ 軍人150人，文官50人を人質とす ⑤ 今後敵対行為をしないこと ⑥ 教会の保護 ⑦ ユダヤ人のアレクサンドリア残留許可 (Chronicle of John 193–94)。

14) Ḥakam では Yazīd の名が脱落しているが，Amwāl 142; Balāḏurī I, 253 によって補った。

15) Ibn Sa'd VII, 513; Suyūṭī I, 99.

16) Ḏahabī V, 61–62.

17) Taġrībirdī II, 4; Suyūṭī I, 123.

18) Suyūṭī I, 125.

19) Ibn Sa'd VII, 517; Suyūṭī I, 127.

20) Ibn Sa'd VII, 513; Ḏahabī V, 184–85; Taġrībirdī I, 238, 308; Suyūṭī I, 134.

21) Ibn Sa'd VII, 517; Ma'ārif 505–06; Suyūṭī I, 134–35.

22) Ibn Sa'd VII, 518; Taġrībirdī II, 239; Suyūṭī I, 162.

23) 嶋田襄平「ズィンマとファイ——歴史的考察——」中央大学文学部紀要 17,「ファイ理論の展開——歴史的概観——」オリエント VI/1,「ガニーマとファイとの対立観念の形式」イスラム世界 1 の各論参照。

24) 嶋田襄平「ズィンマとファイ」 p. 104.

25) 嶋田襄平「ウマル 1 世のサワード租税制度」 pp. 18–19;「イスラーム初期のディーワーン制度」中央大学文学部紀要 33, p. 2 参照。

26) cf. Sawīrus, PO, I, 494–95.

27) al-Qāsim b. Quzmān という名前から，おそらくコプト人出身と思われる。

28) cf. Taġrībirdī I, 351.

29) 嶋田襄平「ガニーマとファイとの対立観念の形式」 pp. 4–8 参照。